

1 視察日時

令和6年7月31日（水）13:30～15:30

2 視察先及びテーマ

岐阜県美濃加茂市

「リバーポートパーク美濃加茂」の整備から、管理運営の仕組みや方法について

3 視察目的

環境経済建設常任委員会が所管する事務に関する審査や調査のため、他の自治体等の先進的な取り組み等について行政視察を実施し、野洲市における課題解決や施策に反映させる。

本市では、激甚化する台風等の自然災害に備え、ハード・ソフト両面で災害に強い“まち”にするため、滋賀県や国土交通省と連携し、大規模な自然災害が生じた際に、緊急復旧活動や消防団の水防活動拠点となるMIZBEステーション（河川防災ステーション）の整備を計画している。

隣接地において滋賀県立高等専門学校の開校が予定されており、MIZBEステーションにおいては、平常時のにぎわい創出に向け、スポーツパークやサイクルパークを整備するとともに、市民や学生の皆さんが自然豊かな野洲川のほとりで交流、活動、学習できるよう、水辺にふれる環境エリア（かわまちづくり）とすることについて検討を進めている。

本年1月には「野洲市MIZBEステーションかわまちづくり計画（素案）」を作成し、隣接する県立高等専門学校の開校に合わせて令和10年4月の供用開始を目指して整備内容の検討を行っている。

先進地である美濃加茂市では、平成30年に「リバーポートパーク美濃加茂」の供用を開始されて以降、利用者が急増して大変賑わっていると伺っている。

河川防災ステーションとしての機能など、「リバーポートパーク美濃加茂」と異なる点もあるが、市民に役立ち喜ばれる場所となるよう、また賑わいのあるまちづくりに向けて、美濃加茂市の構想から約10年にわたる「リバーポートパーク美濃加茂」整備事業における整備計画、計画に関わる体制づくり、整備スケジュール、実際の管理運営の仕組みや方法について視察する。

4 参加委員

委員長 山崎 有子 副委員長 小菅 康子
委員 岩井 智恵子 橋 俊明

5 視察概要

(1) 美濃加茂市の概要

岐阜県美濃地方のほぼ中央部に位置し、昭和29年4月1日に、太田町・古井町・山之上村・蜂屋村・加茂野村・伊深村・三和村の一部・下米田村・和知村の一部の合併によって誕生した。

中心市街地は美濃太田で、古くから木曾川の河港、江戸時代は中山道の宿場町として発展した。明治以降は高山本線、越美南線（現長良川鉄道）、太多線の分岐点となり、商業交通集落として繁栄し、中濃地方の中心となった。

また、美濃加茂工業団地が造成され、中部経済圏の重要産業拠点の一つである。

北方の丘陵地ではナシ・カキの栽培が行われる。市域の一部は飛騨木曾川国定公園に属する。国道21号線・41号線などが通じる。

- ① 面積 74.81 km²
- ② 人口 57,548人
(男性：28,606人 女性：28,942人)
- ③ 世帯数 24,350世帯
- ④ 予算額 一般会計238億円
- ⑤ 議員数 定数16人（欠員0人）

※人口・世帯数・議員数は令和6年7月1日現在

※予算額は令和6年度



(2) 視察内容

美濃加茂市は、名古屋から車や電車で約40分～45分の距離にあり、決して交通の便は悪くないものの、観光客が訪れる拠点がバラバラで、賑わいが生まれていないことが課題であった。

そこで、「美濃太田駅」・「中山道会館」・「リバーポートパーク美濃加茂」の3つを賑わいの拠点として、人の流れを作り、それぞれの賑わいを有効に結ぶことによりエリア全体の活性化を図ろうと、「美濃加茂市かわまちづくり事業」はスタートした。

平成21年4月に国交省の「かわまちづくり支援制度」が創設されるやいなや、美濃加茂市では「かわまちづくりガヤガヤ会議」を開催（全3回）し、「かわまちづくり基本構想（案）」を作成された。

平成21年11月には「美濃加茂市かわまちづくり協議会設置要綱」を策定し、平成23年3月までの間に計6回の協議会を開催された。その間平成21年12月には「かわまちづくり基本構想」を策定、平成22年9月には国交省の「かわまちづくり支援制度」に登録された。

平成23年8月には「かわまちづくり基本計画」を策定し、平成24年度から「都市再生整備計画事業」を開始された。なお、それに先行する形で平成23年9月には国交省による「かわまちづくり整備」が開始され、低水路護岸整備や管理用道路の整備が行われた。

構想からおよそ10年の平成30年に「リバーポートパーク美濃加茂」は供用開始された。なお、「リバーポートパーク美濃加茂」とは愛称であり、正式名称は「中之島公園」である。

元々、中之島公園には、「日本ライン下り」の船乗り場等があったが、平成24年をもってライン下り事業が廃業となったことから、公園は閑散とし、寂れていった。

そこで、当該跡地を整備し、広く市民や近隣市からの集客を図るため、「リバーポートパーク美濃加茂」が整備された。

都市公園としての面積は約2.9ha。

建物としては木造2階建てのビジターハウスのみで、1階はカフェ、2階は貸館ホール（大ホール・小ホール）となっている。

当該建物は、「自然環境体験学習館」とも呼ばれ、2階の貸館ホールでは各種イベントや会議、ワークショップなど様々なシーンで利用されている。（利用料金は1時間500円で利用可能人数は30名ほど）



〔ビジターハウス2階の貸館ホール〕

敷地内の大部分を占めるBBQエリアは、全15サイトのデッキサイトと全3サイトのセンターサイトを備えており、農家直送の新鮮野菜をはじめ、食材や機材は揃っているが、持ち込みも可能となっている。

また、川のアクティビティの発着場として艇庫及びシャワールームを備えており、ラフティングやリバーサップなどの体験教室を実施している。

その他、芝生広場と約180台駐車可能な駐車場を備えている。

また、隣接地には約8haの森があり、デイキャンプ等に利用されている。

管理運営は、民間事業者（指定管理者）が行っており、当該事業者の自己資金により、施設の魅力向上を目的に自らデザインチームをつくり、上屋のデザインから設置まで実施したことで、素敵な空間を演出することに成功されている。具体的には、BBQエリアの屋根を当初美濃加茂市が提案した大手キャンプメーカーの簡易テントから自らデザインしたオシャレな白いコットンタープに変更された。



【BBQエリアの屋根（コットンタープ）】

自己資金を投じて、「もっとお客さんが来られるような環境をつくろう」という意欲のある指定管理者であることが、現在予約が取れないほど賑わっている大きな要因である。

事業スキームとしては、4つのポイントがある。一番大きなポイントは「国との連携」である。河川の許認可等はもちろんのこと、「リバーポートパーク美濃加茂」で行われるイベント（「MIZBERING（ミズベリング）7月7日に水辺で乾杯」など）の全国への情報発信など、国交省の積極的な関わりのおかげで「かわまちづくり」がどんどん発展していった。

第2のポイントとしては「管理運営方法の工夫」である。指定管理と設置管理許可を組み合わせることによって、指定管理者の自主事業の規模と自由度を大きくした。具体的には、バーベキュー広場と喫茶スペース（カフェ）、艇庫の一部を指定管理者に設置管理許可を行い、テナント料のような形で場所代を徴収しており、市としては年間で200万円ほどの収入がある。指定管理者としては、市からの指定管理料はかなり安いですが、カフェやバーベキューで売り上げた分を自主事業の財源に一部充てることができる。そのため、指定管理者は利益を上げるために様々な広告や戦略を用いて、メディア等に情報発信されており、それが施設の賑わいにつながっている。

第3のポイントとしては「地域との連携」である。民間事業者（指定管理者）と各種団体が連携して、土日を中心に様々なイベントを開催しており、今年の「リバーポートパーク美濃加

茂」の昼間の予約はいっぱい、イベントを断念された団体もある。そこで、今後（特に夏場）は暑いということもあり、夜のイベントに力を入れていこうと考えている。

第4のポイントとしては「まちづくり」である。人と人との交流が生まれることがまちづくりであるということを念頭に、ハードだけではなくソフトを大切に、まちづくりを盛り上げていこうと進めている。

令和元年に「かわまち大賞」を受賞したが、その際に評価されたのは「指定管理者の枠組みを用いた運営の仕組みを独自に作り、様々な合意形成を図り、関係者と連携しつつ、創造性に富んだ事業運営を意欲的に行い成功させている。」という点であり、ハードとしての成功よりも運営の仕方であった。作って終わりではなく、しっかりと賑わっている公園として評価されたことが「かわまち大賞」受賞の大きなポイントである。

施設のオープン前（整備前や整備中）には、「川と森の勉強会」を開催し、川のアクティビティなどが実際に上手くできるのか、推進部会のメンバー等とともに検証を行った。この時に様々な団体に協力いただき、そのつながりは現在でも続いている。



〔小学生のラフティング体験〕

岐阜県は、BBQ文化が根強いことから、夏場は予約が取れないほどの人気ぶりであるが、冬はやはり客足が遠のくのが課題であった。そこで、指定管理者による冬のサービスとして「こたつBBQ（こたつで鍋）」を提供したところ、好評であった。これが、現在季節を問わず年中賑わっている一つの要因となっている。

来場者数は、オープン初年度の平成30年度は約11万人、令和元年度は約13万6千人と順調に伸びていたが、令和2年度は新型コロナウイルスの影響で約1ヶ月施設を閉鎖したこともあり、約11万人と落ち込んだ。しかしながら、令和3年度には約12万6千人と回復の兆しを見せ、令和5年度には約18万人の来場があった。（イベントだけで約7万6千人）なお、開業当初の来場者数の目標が4万人であったことを考えると、現在の賑わいがいかに凄まじいものかが伺える。

施設運営の中心者は3名（水口晶氏、渡辺和代氏、藤井秀男氏）である。水口晶（みずぐちあきら）氏は、「リバーポートパーク美濃加茂」の指定管理者である（有）EAT&LIVE（アウトドアスポーツ体験運営会社）の取締役である。東海テレビの様々な番組に出演し、情報発信されている。渡辺和代（わたなべかずよ）氏は、NPO団体「happynet みのかも」の代

表者で、「リバーポートパーク美濃加茂」のオープン前から様々なイベントの企画運営を行ってこられた。この方のおかげで「リバーポートパーク美濃加茂」がイベントができる場所であるということの認識が定着した。藤井秀男（ふじいひでお）氏は、ボランティア団体「龍宮倶楽部」の代表者で、「リバーポートパーク美濃加茂」に隣接する木曾川河畔の約8haの森を4年間に渡りボランティアで整備し、素敵な空間を創り出す、森の開拓者である。



〔隣接する約8haの森〕

今後の課題としては、賑わい過ぎて駐車場が足りないことがあり、検討課題となっている。

また、今後の展開としては、岐阜県主体で近隣5市町との共同イベント「River to Summit」や音楽イベント「ONE PARK RIVERFES」の開催を10月に計画している。

さらに、これまで「リバーポートパーク美濃加茂」には遊具が1つも無かったが、令和6年にバスケットゴールを設置し、市内に多く在住する外国人とともに美濃加茂市民と一緒にバスケットボールを楽しむことで、美濃加茂市が謳う「多文化共生」を象徴するものとなっている。



〔デジタルハウス1階のカフェの一角にある写真撮影スポットにて〕

(3) 主な質疑応答

問：河川公園内にある工作物の撤去訓練は年に1回行なっているか。

答：河川区域の中では、撤去計画に沿って、訓練をしなければならないが、このエリアは河川区域ではなく、河川区域と河川区域の間に挟まれた公園である。「リバーポートパーク美濃加茂」では、増水時に撤去しなければならないという指導はあるが、訓練はしていない。ただし、「リバーポートパーク美濃加茂」の下流の公園については、野球場があるため、バックネットを年に1回訓練で撤去している。

問：線状降水帯発生時などにおける対策は、どのようにされているのか。

答：そのあたりは一番危機感を持って、退避計画を作成し、ある程度水位が上昇したら、全てキャンセルしている。年間3～5日程度は閉園することがある。

問：貴市では、市民の方や団体の方のご意見を粘り強く聞いて、作っていかれたと思うが、今後、当市が具体的に事業を進めていくうえで、大事に考えていった方が良い点は何か。

答：アンケートを行ったり市民の意見を聞いたりすると、当然ながら多様な意見が出るが、その中からどれを選んでいくかということが大事である。



担当職員だけではなく、アクティビティをされている方や、コンサルなどの意見を聞きながら、市民意見を全て取り込むのではなく、どれを尖らせていくかを考えることが大切である。市民協議会等での意見をどのように落とし込んでいくか、職員の勉強も必要で、それぞれの意見をどのように取り入れて繋げていくかということが大事である。

(4) 委員の所感

①日本ライン下りの船着き場であった跡地を、廃業後にまちづくりに生かせないかと考え、市民団体、地域、行政（国、市）メンバーによって発足されたのが、「ガヤガヤ会議」である。会議メンバーの皆さんが、まちづくりに利活用したいという願いを持って集まられた。

計画が先行したのではなく、メンバーの皆さんの熱い思いから始まっていると感じた。ちょうど「かわまちづくり支援制度」が創設され登録できたこと、そして協議会からの様々な計画に対して国土交通省から整備事業、事業費も含めて協力を得られたことが成功の条件であった。担当の市職員の方、指定管理者、ボランティアの方が情熱を持って、ワクワクして取り組んでおられ、いつも新しいアイデアが生まれていることが伝わってきて感動した。整備したら終わりではなく、それが始まりで、「どうしたら来てもらえるか、喜んでもらえるか」を考え続け実践されて今に至っていると思う。野洲市では、河川防災機能、そして高等専門学校設立がMIZBEステーションのきっかけとなっているので条件は異なっている。しかし、「かわまちづくり」という観点ではどうしたらまちの活性化につながられるか、他市からも利用してもらえるか、そのような夢や希望、思いのある市民、団体を巻き込んで、拡大したかわまちづくり推進協議会を作っていただきたい。限られた時間ではあるが、狭く、小さくまとめるのではなく、行政と市民が協力して取り組んでいただくことを期待する。

②美濃加茂市かわまちづくり基本計画では、「美濃太田駅」「中山道会館」「リバーポートパーク美濃加茂」の3拠点を賑わいの拠点として、人の流れを作り、まちの活性化を図ろうと進められてきた。平成21年から10年に渡り、市民や市民団体、地元の商工業者、NPO法人、有識者、職員など幅広い市民が集まり、「かわまちづくりガヤガヤ会議」「かわまちづくり協議会」「かわまちづくり推進部会」で基本構想、基本計画、実施計画を立てていかれた。部会に参加する団体・市民がどんどん増えていった。市民の要望を事業にまとめていくことは大変だったそうだが、その議論の積み重ねがベースにあって、今の賑わいを生み出された。「リバーポートパーク」の運営は民間事業者（指定管理者）が行っておられるが、とても意欲のある指定管理者でどんどんいいものにしていこうとされているとのことだった。「川と森の勉強会」では、整備の途中でも勉強会を行って、よりいいものにしていこうと議論を行ってきたとのことであった。「川と森の勉強会」では川の持つ楽しみや魅力を伝える一方で、川の持つ危険性や万が一の時の対処法などを学ぶ事業をされている。また「バーベキュー事業」では、事業者自ら出資してテントなどをよりクオリティの高いものにして、施設の魅力を向上させたり、こたつBBQなど冬にも利用してもらえる事業を始めるなど、リバーポートパークを作った終わりではなく、より賑わいを生み出すための努力を絶えずされている。運営中心者は「アウトドア体験運営会社」の経営者、「自然体験活動イベント」の代表者、「木曽川河畔の森を整備」されているボランティア団体代表者、以上3名の紹介があったが、主にこの方たちがキーパーソンとなってこの事業を運営されている。このキーパーソンの存在が

大変大きいと感じた。また、担当課（建設水道部土木課）の職員も、事業者任せではなく、一緒に森の整備をしたりするなど、常にコミュニケーションを図りながら、共にいいものを作っていこうとされていることが、職員の話される熱意からも感じられた。自らが楽しんで事業をすすめておられると感じた。本市のMIZBEステーション事業は「防災ステーション」と高専の教育施設を兼ね備え、美濃加茂市の事業とは異なる点もあるが、市民のための施設については、もっと基本構想から市民や様々な団体と一緒に考えていくことが必要ではないか。本市では市民懇談会が1回行われただけで、参加者も限られていた。かわまちづくり協議会の委員は、市長・国県・野洲市商工会長・観光物産協会会長・北野学区自治連合会会長の7名と限られており、行政主導の感が否めない。高専の開校にあわせて事業の期限が決められてはいるが、やはり市民が望む、市民のニーズに合った施設・事業にするには、幅広い市民・団体・商工業者・有識者などと構想をもむ場が必要ではないか。市民ホールの議論と同じで、基本構想から市民とともに作り上げていくことが、将来的に持続していくことにつながると思う。

③整備に至った経緯については、国交省（大臣の力）と市との近い距離間があったことが大きい。都市再生事業+国庫補助（50%）国からは、レクリエーション部門には補助はないが、河川の整備としては、国庫補助対象となった。市民協議会で、「ああでもない、こうでもない」と意見が交わされ、設計がどんどん変えられていった。職員としてはめんどくさい面はあったが、見えるデザイン化としては良かったのではないか。プレイヤー（イベントをやる人たち）と関わると一杯やり手がいることが分かり、そのプレイヤーに土地を選んでもらうことがポイントである。「かわまちづくり協議会」の協議では、お金を落としてもらうことでは、話は進まなかった。指定管理をなりわい（生業）にしている人も多い。カフェの席が満席でも儲からない（それ以上になると、飲料水とトイレの水など水道代に跳ね返るだけ）で、課題である。市民がアクティビティの運営や参加に積極的になった要因は、市民の「木曾川で遊びたい」の声から、こうした発想を聞き入れて事業に反映されたのは、長く関わっている職員さんの働きは大きいと思った。今後の課題として、駐車場が足りない。他は、時間の関係上、現地での案内になった。県外としては、名古屋方面が多い。「2018年 ウッドデザイン賞」、「2019年かわまち大賞」受賞など、注目・成功に至った要因はコンサルから勧められ、コンサルの費用持ちで受賞に至った。（市からの要望でなかったのは意外だった）今後の展望については、ペット愛好家をターゲットにしたい。これから、期待が高まると思う。

④美濃加茂市はかつての中山道の51番目の「太田宿」で栄え、木曽川の渡しでも有名であった。私の家の前の市道も旧中山道であり、繋がっていることが運命的であると感じた。街は比較的落ち着いた、山手中心の開発整備が進められたものと感じたが、街の規模から考えられない「中部国際医療センター」の施設整備がインパクトとして印象に残った。さて、今回の研修事項である「リバーポートパーク美濃加茂」については、全国に名が売れている「木曽川」を前面に出し、木曽川の水量が豊富であり、水辺景観に恵まれた地理的条件を見事に生かしていることに感銘を受けた。本市のMIZBEステーションの整備地は、水辺から少し離れることから、整備施設の配置に工夫が必要であり、国土交通省などから情報を受け、十分な議論を重ねられることにより、目的が達成できるものと期待する。また、このような整備には、「リバーポートパーク美濃加茂」のような、個性豊かなキーパーソンの存在が肝要であり、そういった人材を育成する取り組みも必要であると強く感じた。



〔美濃加茂市役所玄関前にて〕



〔リバーポートパーク美濃加茂入り口にて〕



〔ビジターハウス入り口〕